

第494回 難研セミナー

第67回 難治疾患共同研究拠点セミナー

下記により難研セミナーを開催しますので、多数御来聴下さい。

記

日時：平成25年1月11日(金) 17:30～18:30

場所：M&Dタワー13階 大学院講義室2

演者：稲葉 カヨ 教授

(京都大学大学院 生命科学研究科 生体応答学分野)

演題：「ノーベル賞へと繋がった樹状細胞研究の道」

要旨：1973年にSteinman博士が発見した樹状細胞は、当初懐疑的に見られていたものの、その後の一連の研究によって抗原提示細胞として免疫応答の誘導と免疫寛容の誘導ならびに維持において主要な役割を担っていることが広く知られるようになった。また、骨髄や末梢血中の前駆細胞の培養により、樹状細胞の分化誘導系が確立されたことにより、疾患の防御や治療のための細胞ワクチンとしての利用に注目されるようになり、現在では実際に治療に用いられている。このような成果が、自然免疫の誘導に関与するパターン認識受容体の発見者であるJules A. HoffmannとBruce A. Beutler両博士と共に昨年度のノーベル生理学・医学賞を受賞するという快挙に繋がった。

しかし、臨床的には残された問題が多いことも事実である。一方、樹状細胞群の細胞構成は当初考えられていたよりも遙かに複雑であり、生体内樹状細胞のサブセットやそれぞれの機能解析に加え、細胞分化経路に関する研究も進みつつあるが、多くの研究がマウスを用いておこなわれているために、臨床応用を目指す“nature’s adjuvant”として樹状細胞を考えた時、未解明の課題も残されている。

本講演では、樹状細胞研究の道をふり返りつつ、今後の展開を考えてみたい。

参考文献：Inaba, K. A tribute to Ralph M. Steinman. *Int. Immunol.* 24: 1-3, 2012.

連絡先：生体防御学分野 橋木俊聡（内線4746）

共催：分子細胞生物学分野 澁谷浩司